いのちと地域を守る

考える

祭神と津波被害に相関

東日本大震災の被災地の神社に祭られる神の種類と過去の津波被害の有無との関係が深いことが、神戸高専都市工学科の高田知紀准教授（地域計画論）らの研究グループの調査で分かった。南海トラフ地震で津波被害が危惧される和歌山、三重両県の紀伊半島沿岸、兵庫県の淡路島でも同様の調査を実施。神社の由来や立地場所の検証が地域の津波災害への備えに役立つとし、詳しい考察を進めている。

（報道部・菅谷仁）

■神戸高専・高田准教授ら　被災3県調査

神社起点にリスク再考

高田准教授らは、各神社に祭られている神の種類や神社建立の経緯にまつわる伝承と津波被害の関係に着目。2011年5月から岩手、宮城、福島の被災3県で調査を始めた。

宮城県沿岸部を中心に北は大船渡市、南は相馬市までの沿岸にある神社計215カ所を対象に、被災の有無と祭神の種類の相関を調査。12年7月、土木学会に「東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究」と題する論文を発表した。

論文に収めた調査結果は表の通り。八岐大蛇（やまたのおろち）退治で知られる素戔嗚尊（すさのおのみこと）を祭った神社17カ所のうち、損壊被害があったのは宮城県山元町の八重垣神社のみだった。和歌山県の熊野三山を総本社とし、山地に建立されることが多い熊野神社は11カ所全てで被害ゼロ。八幡系神社は24カ所のうち損壊したのは6カ所で、比較的被害が少なかった。

一方、稲荷系の神社は11カ所のうちほぼ半数の5カ所が損壊。天照大神（あまてらすおおみかみ）系の神社も18カ所のうち9カ所が津波で壊れ、最も多いことが分かった。

高田准教授は「素戔嗚尊は無病息災の神。八岐大蛇は津波や洪水を招く化身とも解釈され、数百～千年前から人々が災害時に加護を求めていた。そのため地域の治水上の要所に鎮座している」と指摘する。

被害が目立った稲荷系の神社は稲や食物に関わる倉稲魂命（うかのみたま）を祭る。農地に建立されることが多く、高田准教授は「古代の農地は湿地を利用した。平常時に祈ることが多い神。起伏が穏やかな集落に建てられる傾向があり、今回の被害につながった」と推測する。

研究グループは、内閣府が発表した南海トラフ地震の被害想定を基に15～16年、紀伊半島沿岸と淡路島の神社なども調べた。震災被災地での調査結果を生かし、祭神別の被災予想を明らかにし、地域の災害リスクの検討に役立てる。

高田准教授は「高齢化や過疎化によって、先人たちがどのような祈りを込めて各地の神社を建立したのかが忘れられつつある。神社を起点に今後の地域の災害リスクを考えるきっかけにしたい」と語る。

◇東日本大震災被災地の主な神社の祭神別被害状況

名称	所在地	津波被害の有無
＜素戔嗚尊系＞		
八坂神社	大船渡市大船渡町	○
八坂神社	陸前高田市米崎町	△
八坂神社	同市気仙町	○
御崎神社	気仙沼市唐桑町	○
八雲神社	同市赤岩	○
須賀神社	同市本吉町	○
八雲神社	石巻市福地	△
八雲神社	同市中野	○
八雲神社	同市雄勝町	○
八雲神社	同市鹿又町	○
八雲神社	同市須江館	○
八雲神社	宮城県女川町指ケ浜	○
須賀神社	東松島市赤井	○
須賀神社	同市西福田	○
八坂神社	仙台市若林区今泉	○
八雲神社	宮城県亘理町逢隈	○
八重垣神社	同県山元町高瀬	×
＜稲荷系神社＞		
稲荷神社	陸前高田市小友町	×
白鳥稲荷神社	宮城県南三陸町歌津長沢	○
稲荷神社	同町歌津峰畑	△
稲荷神社	石巻市北上町十三浜	○
稲荷神社	同市北上町長尾	○
正一位稲荷神社	同市狐崎浜	△
稲荷神社	同市侍浜	×
稲荷神社	同市門脇	×
稲荷神社	東松島市大曲	×
稲荷神社	岩沼市下野郷	×
青巣稲荷	宮城県山元町山寺浜	×

※津波被害の有無＝×損壊△敷地内一部浸水○被害無し

伝える

2011.3.11

宮古市の電器店経営舘洞克義さん（71）は東日本大震災発生時、同市鍬ケ崎にあった自宅兼店舗で津波にのまれた。海からは約100メートル。逃げ場を失い頭まで水に漬かり、死を覚悟した。「大丈夫だろう」と油断し、すぐ高台に避難しなかったことを反省する。

■逃げ場失い水に漬かり死を覚悟（宮古市）

舘洞克義さん

油断せず高台避難を

地震発生時は所用で宮古市田老の国道45号を車で走行中でした。ハンドルを取られるほどの揺れ。いったん車を止めました。カーラジオは「大津波が来る」と伝えていました。店に引き返し妻と孫2人、パート従業員を高台にある私の実家に先に避難させました。

顧客台帳などを持って戸締まりをし、自分も実家に向かおうとした時、家族から「孫の荷物を持って来て」と電話があり、荷物を持って玄関を出ようとしたら、足首程度の高さの波が来ていました。近くの沢を上って逃げようとも思いましたが、靴がぬれるし、この程度なら2階でやり過ごせると考えました。それが甘かった。

2階廊下から階段の下を見ると、黒い水が猛スピードで上がってきました。一瞬にして天井付近まで水かさが増加。水をかき分け、天井の高い和室に逃げようとしましたが、流れに押され身動きがとれません。

廊下天井の照明器具につかまり、空気を吸えるだけ吸いました。ほぼ同時に全身が水に漬かり、息を止めて耐えました。もう助からない。覚悟しました。どのくらい時間が経過したか、記憶がありません。気付くと2階廊下にいました。

ずぶぬれのまま何とか外に出て、壊れた家々の上を歩いて実家へ。無我夢中で実家に着いてようやく「寒かった」と感じました。

しばらく実家に身を寄せ、店を片付けました。テレビなど商品は全て使用不能に。被害は甚大でした。

その後、親族や知人の力添えもあり、震災の約1カ月後、みなし仮設住宅に移り、元の店から内陸へ約2キロのJR宮古駅付近に仮店舗を開きました。2014年7月には仮店舗の近くに自宅兼店舗を再建しました。

鍬ケ崎に戻りたい気持ちはありましたが、年齢や安全面、土地区画整理事業に時間がかかることなどから諦めました。年を取るほど、災害時の避難が大変になるからです。

津波の恐ろしさが身に染みました。震災前、警報が出ても数十センチにとどまり、油断していました。命を最優先に、いち早く高い所に逃げる。「てんでんこ」の教えをかみしめています。

（舘洞さんは取材後の6月8日、病気で亡くなりました。震災当時の貴重な証言であり「震災の経験、教訓を伝えたい」という舘洞さんの遺志を尊重し、遺族の了解を得て掲載しました。文中の年齢は取材当時です）

津波で甚大な被害を受けた宮古市鍬ケ崎地区＝2011年3月13日

探る

■犠牲者の生きた証し紡ぐ調査

被災地の希望の光に

岩手大教授　麦倉　哲さん

東日本大震災で関連死も含め1285人が犠牲になった岩手県大槌町で、2014年度から、犠牲者の記録を残す聞き取り調査「生きた証（あかし）プロジェクト」に取り組んできた。

通常の調査とは手法も内容も異なる。故人の人生や被災状況などを振り返り、遺族や近親者と共同で「亡き人の物語」を紡ぐ。地道な作業で集めた記録のうち、遺族から了解を得られた545人分が今年3月、冊子として町から刊行され、地域の被災者や一般市民らとも物語を共有できるようになった。

大切な人を亡くした遺族は、現実に起きたことをなかなか受け入れたがらない。一方で、故人のことを決して忘れたくない気持ちもある。プロジェクトで集めた記録は、遺族が故人を思い出したい時、いつでも故人の物語をひもとける安心を与え、喪失したものかけがえのなさを理解する助けにもなる。被災者の「心の復興」を進める上で、プロジェクトが果たす役割がここにある。

むぎくら・てつ　早大卒、立教大大学院社会学研究科博士前期課程修了。早大大学院文学研究科社会学専攻後期博士単位取得退学。東京女学館大教授などを経て09年4月から現職。専門は社会病理学、災害の社会学。群馬県出身。61歳。

犠牲者と遺族の対話に立ち会い、多くの物語に遭遇した。「3・11」を忘れないために車のナンバーを「311」にした人。故人に向けて日記を書き続ける人。供養のため装飾品を作り続ける人。亡き家族が毎晩、仮設住宅に会いに来ると実感している人―。

こうした物語の一つ一つは何を意味するのか。災害による死は単なる数字上の死亡者ではなく、故人と関わる人々にとって「共同の死」であり、その死を受け入れるためには、それぞれにとっての特別なストーリーが必要だということだ。

調査は当初、岩手大が町から事業受託して私が責任者を務め、16年度からは、自分が立ち上げたボランティア組織が主体となり実施してきた。

記録作成に関わったのは昨年11月現在、死者1285人の半数の634人にとどまる。調査はまだ途上だ。今回の記録刊行がプロジェクトの終着点でもない。心の復興の道のりは長い。遺族や私たちと死者との対話、遺族が語り継ぐ活動は今後も続けていく必要がある。

犠牲者の生きた証しを紡ぐ意義とは①死者を忘れない②死者を供養する③後世へ教訓を継承する―の三つだと考える。特に③は災害を検証し、将来の災害への備えを促す意味もある。

犠牲者一人一人の「死」を検証することが、残された被災者の心の復興につながり、災害の教訓を伝えることにもつながる。生きた証を紡ぐ作業から見えてきたものは、被災地にとって「希望の光」になるはずだ。

現場から

防災運動会で住民が交流

秋田市旭南地区自主防災組合連合会長
佐々木久左ェ門さん（67）

地域住民が連携した防災体制の構築を目指して活動しています。秋田市旭南地区の約1800世帯で構成し、夏と冬に避難所の運営訓練をしています。

昨年10月、市旭南小体育館で、東北大災害科学国際研究所の教授らと企画した防災運動会を初めて開きました。住民ら約130人が、毛布で担架を作って負傷者を運ぶゲームなどを通じて防災の理解促進や住民の交流を図りました。

10月には、他の地区と合同で防災運動会を実施する計画を立てています。地域をまたいだ防災体制を築くきっかけになればと考えています。

生徒向け「防災安全新聞」

多賀城市高崎中教諭
防災主任
狩野　彰一さん（57）

東日本大震災で学区の4割が津波で浸水し、避難対策は大きな柱です。2012年度から「防災安全新聞」を作り、地震や津波、不審者などの情報を新聞記事も活用して、生徒向けに月3回ほど発行しています。

昨年11月22日に津波注意報（のち警報）が出て多賀城市内の砂押川を遡上（そじょう）した時、6日に市総合防災訓練があったにもかかわらず、自宅から避難した生徒は校内アンケートの結果2％ほどでした。避難率向上には、避難所で役割を持たせるという「させる活動」ではなく、地区生徒会を設けて「主体的に取り組める活動」が必要と考えています。